

「生徒支援」の総合演習

— 中学校の総合的学習と大学教職課程のコラボレーション —

岩澤啓子

河上婦志子

1. はじめに

2005年度から始まった神奈川大学と横浜国立松本中学校との連携事業の1つは、松本中学校の総合的学習に神奈川大学の学生の支援を取り入れるという形で、生徒と学生双方の学びの場を生み出そうとする試みであった。ただし、これまでは松本中学校の総合的学習のテーマ「地域学習」の中のカテゴリーの1つとして、神奈川大学を選択した一部の中学生と、神奈川大学キャンパスを紹介し案内する20名前後の学生との活動にすぎなかった¹⁾。

しかしそれでは、横浜市教育委員会の「よこはまパイオニア・スクール」事業としての取り

組みというには不十分だと反省があり、もっと全学的な広がりを持たせたいとの要望が生れてきていた。また一方神奈川大学でも、ボランティア活動として実施することは学生の負担や時間配分の点で問題があることが明らかになりつつあった。学生に授業時間以外での活動を求めることには限界もあった。

そこで2008年度は、毎週金曜日の午後を松本中学校の総合的学習の時間とし、また神奈川大学でも総合演習の授業の1つを同じ時間帯に設定し、生徒と学生の授業を重ね合わせることにした。この授業に参加した学生は、事前に授業内容についての説明を受け、中学生との活動を自ら望んで集まった学生たちである。その人

表1 「地域学習」件カテゴリー

A 祭り	盆踊りを練習し、祭りや地域行事に参加してそれを披露したり、地域行事の手伝いをする ことで地域の方と交流し、地域を活性化します。
B 事業所	地域の各事業所で、1年生は職業インタビュー、2年生は職業体験、3年生は事業所貢献 を行います。
C 福祉	福祉施設、点字、手話などの学習やボランティア活動を通して、福祉やバリアフリーにつ いて考え、行動します。
D 環境	学校内外や地域で清掃活動、美化活動、環境調査等を行い、環境について考えていきま す。1年生は調査中心、2・3年生は体験活動中心です。
E 学校	1年生はインタビュー中心に活動します。 2・3年生は体験や意見交換をして、交流しながら学びます。
1 [保育園・幼稚園]	
2 [朝鮮学校・神奈川大学・聾学校]	

表2 日程と学習内容

月 日	A 祭り	B 事業所	C 福祉	D 環境	E 学校
4/11	大学にて：授業オリエンテーション (中学校から校長・教務主任・担当教員が来校，学生に趣旨説明)				
4/18	中学校にて：挨拶と見学(中学校の場所確認と施設見学)				
4/25	中学校にて：昨年度の取組みと今年度の計画オリエンテーション (担当教員から方針の説明と中学校訪問時の心構え等の伝達を受ける)				
5/2	大学休校(中学生はカテゴリーの決定)				
5/9	中学校にて：生徒との顔合わせ・課題設定・企画立案の支援				
	自己紹介，ソーラン踊り練習	自己紹介，訪問希望事業所調整，テーマ設定	自己紹介，課題設定	自己紹介，課題設定	自己紹介，課題設定，計画立案，班づくり
5/16	中学校にて：課題追求学習サポート(調査方法の検討支援)				
	ソーラン踊り練習	訪問希望事業所調整，テーマに基づいてグループ編成	課題追求	課題追求	課題設定，保育園と幼稚園の違いについて学習，班決定
5/23	中学校にて：課題追求学習サポート(調査や体験準備の支援)				
	ソーラン踊り	練習課題追求，事業所探し	課題追求	課題追求	課題追求，グループづくり，テーマ決定，学習の流れの確認
5/30	中学校にて：課題追求学習サポート(体験訪問のアポの取り方や礼儀など支援)				
	ソーラン踊り練習	課題追求，事業所探し，事業所決定	課題追求	課題追求	課題追求，活動内容の話し合い，1・2年生 神奈川大学訪問 (生協，図書館，学食，ジム見学)
6/6	大学にて：カテゴリー毎のグループ討議，中間まとめ				
6/13	中学校にて：課題追求学習サポート				
	ソーラン踊り練習	課題追求，事業所調べ，訪問依頼	課題追求	地域観察・調査，まとめ	課題追求，園での発表(紙芝居等)の準備，連絡原稿の作成
6/20	中学校にて：課題追求学習サポート，まとめと発表準備				
	ソーラン踊り練習	事業所へのアポ，インタビュー内容のまとめ，体験内容を定める	課題追求	地域観察・調査，まとめ	課題追求，園での発表(紙芝居等)の準備，訪問先への連絡
6/27	中学校にて：課題追求学習サポート，まとめと発表準備				
	ソーラン踊り練習	インタビュー内容のまとめ，体験内容を定める，3年生山田畳店等訪問	課題追求	地域観察・調査，まとめ	課題追求，園での発表(紙芝居等)の準備，事前準備
7/3・4	体験訪問				
	ソーラン踊り練習，隊形練習	横浜銀行反町支店，日本堂，TSUTAYA片倉店，ローソン，サンクス，セブンイレブン，松本堂パン，神大寺地域センター，ENEOS，松月堂等訪問インタビュー，体験のまとめ作成	ライフフレンド，ひまわり介護，ライトセンター，三ツ沢地域ケアプラザ，サークルわかば等訪問体験	地域調査，火力発電所訪問発表準備	保育園・幼稚園訪問，一日体験と発表準備，神奈川大学訪問，盲特別支援学校・朝鮮学校等訪問
7/11	大学にて：振り返りと反省・まとめ(中学校から校長，副校長，教務主任が来校)				
7/18	中学にて：(大学生任意参加)学年別発表会				
10/31	中学にて：(大学生任意参加)全校発表会				
11/4	中学にて：(大学生任意参加)全校発表会				
11/12	中学にて：(大学生任意参加)全校発表会				
11/15	中学校にて：タウンミーティング(大学生代表2人参加) (生徒・保護者・地域・教員の前で，授業を体験した感想を発表する)				

数は男子16名、女子12名、総数28名であった。学年は主として2年生であったが、中には3年生、4年生も混じっており、すでに総合演習の単位修得を済ませていて、この授業への参加が単位に結びつかない、純粋なボランティアとして活動した学生も若干名いた。また所属学部も法学部・経済学部・人間科学部・外国語学部・工学部と多岐にわたっている。

この授業の大学側のねらいは、①4年次での教育実習を控えた学生たちが、学校現場で生身の生徒たちに接し、言葉を交わし、観察し、理解を深める機会をもつ、②学生たちが生徒ではなく教師の側に身を置いて、生徒や授業についてさまざまな気づきを得る、③生徒を「教え指導する」のではなく「学習を支援する」ことを実地に体験する、の3点であった。

2. 授業の経過

1) 松本中学校「総合的学習」のテーマ

2008年度の松本中学校の「総合的学習」の時間の目標は次のように設定されていた。

1年：「地域を知る（調べる）」

地域社会に出て学ぶ中で人々の営みを知り、自分の生き方を見つめる。

2年：「地域に学ぶ（体験する）」

地域社会に出て行き、その体験を通して自分の生き方を考える。

3年：「地域に還す（提案する）」

これまでの学習を生かし、地域社会に貢献する活動を企画・立案・実践する。

表1のように、どの学年にもAからEまでの5つのカテゴリーがあり、生徒たちは自分たちの関心をもとにカテゴリーを選び、学年ごと、カテゴリーごとにグループを作った。一方学生たちは2-3人ずつ、それぞれのカテゴリー・グループに参加し、生徒たちの活動を支援することになった。

2) 活動日程

松本中学校の教員と大学教員とは予め3月に打ち合わせをしておき、4月の授業開始からすぐにプロジェクトを開始した。大学での授業と松本中学校での活動を組み合わせることと、松本中学校の教員にもできるだけ大学での授業にも参加してもらって中学校側からの要望や感想を学生に伝達することに努めた。大学側からも、折に触れて中学校を訪問し、教員との打ち合わせや学生・生徒の活動状況を観察することにした。その日程と活動内容は表2の通りである。

3. 授業の成果

学生たちは毎週、①気がついたこと・学んだこと、②楽しかったこと・うれしかったこと、③困ったこと・悩んだこと・その他、についてA4判1枚のレポートを提出し、すべての授業が終了したあと2,000字から3,000字程度の最終レポート「この授業で学んだこと」を書いた。これらのレポートから、学生たちの学びを跡づけ、授業の成果として描き出してみよう。

1) 中学生との出逢い

事前に授業内容の説明を受け、また松本中学校校長や教員および大学教員からの諸注意を受けて松本中学校に出かけた学生たちは、緊張ではちきれそうになっていた。彼らのその緊張を和らげ、安心感や参加への意欲を与えてくれたのは、中学生たちからの挨拶だった。

不安でいっぱいだった私に子供たちは元気に挨拶してくれたのです。私が中学生のときには考えられない事でした。その挨拶の気持ちよさに私の不安は和らぎ、頑張ってみようという気がおき授業に対するやる気が起きました。

私の想像では、中学生は少し怖いという感

じだった。しかし、いざ学校の敷地に入ってみると、中学生たちがいっせいに私たちに挨拶してきたことに驚嘆した。……今度は負けじと挨拶して見せようと思った。

初めて校舎に入った時はもう心臓がはちきれそうで、とてもドキドキしていた。けれども、松本中の生徒はとても元気がよく、とても気持ちよく挨拶してくれた。それだけで緊張がほぐれて、不安もいつの間にかなくなっていた。

ほとんどの学生はまず最初に、挨拶の重要性を生徒たちから学ぶことになった。この体験は、声かけがもたらす効用を学生に理解させるだけではない。生徒たちが自分たちから声かけをしたことによって、学生に生徒の主体性を認知させ、対等な関係を取り結ぶ相手として自分たちを位置づけさせたことになる。

それぞれの担当クラスに配置され、生徒の前で自己紹介したり、生徒の中に入っていったりしようとした時、新たな緊張が彼らを待っていた。

教室に一歩足を踏み入れたとたん、生徒たちが私たちに一齐に視線を集めた。そのとき、「先生とは毎回これだけの視線を感じながら仕事をしているのだな」と感じた。

初日の授業で自己紹介をしたのだが、相手が中学生とはいえ、やはり緊張して思うように話せなかった。……教師というのは……毎日のように生徒の前に立って話すというのが仕事なのだから、緊張しているようでは話にならない。

学生たちの多くは想像以上に緊張し、生徒たちを怖がっていたのだった。また教師の立場に身を置いてみることで、その仕事や役割を新鮮な驚きをもって理解し始めていることがわか

る。彼らはこの後、自分たちが積極的に生徒に関わっていくように努力することで、生徒たちとの垣根が取り払われていくことを実感する。教育実習に出る前に、こうした機会を学生にもたせることができたことの意義は大きい。

2) 生徒や授業を観察する

短時日の間に生徒たちの中に入っていける学生もいたが、そうでない学生もいて、中学校教員の足手まといになっているのではないかとの不安も感じさせられたが、学生たちは生徒の観察を通じて、少しずつ生徒理解を深めていった。もっとも多い感想は、生徒たちが多様であることの気づきだった。

普段はやる気なく机に突っ伏してダレている生徒が、自分の興味のある事柄を本で調べるときは、とても積極的に活動していたのを見て、ある一面だけを見て、真面目・不真面目と決め付けるのではなく、さまざまな面からみなければ、その性格や個性はわからないのだということにも気づけた。

見ていてまず一番に思ったことは中学生というのは子供ではあるけれども大人に近づいている段階だということです。……自分がなぜリーダーをやりたいのか発表していくのですが、その内容がとてもしっかりした内容で子供とは思いませんでした。……そういう大人から自立し始めているところを見て驚きもしました。

生徒の対応の仕方にもさまざまな方法が必要であることがわかりました。……それぞれの生徒により同じ注意の仕方ではよくないことがわかりました。

女の子はいつも、指示があるとすぐに行動に移し、きちんと時間で終ることができた。男の子はどうしても集中力が切れてしまう子

が多く、私もそういう班について、気持ちを授業に集中させようとするが多かった。

女子がテキパキと作業を進めるのに比べ、一部の男子はお喋りが止まらない上に作業もしないので、作業させることに関してとても苦労しました。

おそらく中学生の特徴であるこうした行動や男女差は中学校教員にとっては指導上の常識なのであろうが、学生にとっては目新しい発見であったのだ。自分自身が中学生であった頃には見えていなかった、中学生らしい行動や態度について認識を深めることができたようだ。

3) 過去の体験の再認識

学生たちは中学生を観察し、教員との関係を考察する中で、自らの中学時代の体験を思い出し、新しい目で評価し直すことができるようになる。

私は中学生のとき先生や大人を馬鹿にしている面が多々ありました。友達と一緒に先生に対し暴言を吐いたり授業中に騒いだりと迷惑を掛けてばかりでした。……中学生たちの私たち大学生への態度を見て、昔の自分の行動に対し今更ながら反省の気持ちが生れてきて、中学校の先生たちに申し訳ないことをしたと謝りたくなりました。

私は中学生の時に、どうして大人はいつも私たちの行動を把握しようとしたり、自分たちだけで自由にさせてくれないのだろうと思っていました。でも今回、自分が大人の立場に立ってみて、その理由が分かりました。……生徒のために思ったからこそ、生徒から悪口を言われても、反抗されても、先生は待っていたのだと思います。

私が中学生の時にいた、やたら怒り、怒鳴

る教師は自分の意に反するから怒っているだけではなかったかもしれないと考えさせられてしまいました。……この授業で中学生に触れてからは、もしかしたらあの教師は中学生が直面する授業の重要性を理解していたから怒鳴り散らしていたのかもしれないと感じています。……怒鳴ることは何となく教育的にはあまり良いことではないということが以前の私の意見でしたが、叱るときはきっちり叱り、褒める時はきっちり褒めるといったメリハリが大切だということが今の私の意見です。

学生たちは、現時点の生徒たちとの関わりの中でもさまざまな学びを体験しているが、それをきっかけに思い出した過去の体験からも学ぶという、二重の学習を経験することができたようだ。またこのような複眼思考ができるようになることも人間としての成長につながっていくだろう。

4) 役割の獲得

学生たちは中学校教員の指示に従って、生徒たちの活動を支援し補助することになっていった。最初からその役割にすんなり入っていきける学生もいたが、ただウロウロするだけの学生もいた。何をすればよいのか理解できなかったのだ。

担当の先生から「生徒たちを見て回ってあげてください」という指示を出されたが、はじめ何を見て回るのがわからなかった。……私たち大学生は先生方に自主性を期待されているのだということを知り、積極性が必要だと気づいた。……声かけをするうちに「見て回る」ということは生徒たちが「やるべきことをきちんと理解しているか」、「困っていることはないか」を見て回るのだとわかった。

中学校教員にとっては当然の認識や活動も、学生には全くの未知の領域だったのだ。しかし学生たちは手探りしながら自分の取るべき道を発見していった。

必要なのは、自分から何ができるかを探すという態度であり、分からなかったら先生に聞くという行動力でした。常に誰かの指示を待つのではなく、自分で考え行動することが実際に教員になったときに必要になってきます。

単純だが具体的な役割を与えられることによって、クラスに位置づけられたと感じた学生がいた。

この日からパソコンを職員室から借り、教室で立ち上げ、授業後に職員室へ片付けること、が私の仕事になった。きちんと役割をもらえることはとても嬉しかった。……みんながパソコンまだ～? と言ってくれることも嬉しかった。

学生を迎える中学校教員には、学生の気づきと積極性をじっくりと待つという姿勢も必要だが、小さな役割を与えることによって帰属感や主体性を育てることも大切なのだとわかる。

5) 名前を覚えること

6月6日、大学での「中間まとめ」の授業で、生徒が名札をつけていないこと、そのために学生が生徒の名前をほとんど覚えていないことが明らかになった。早速中学校側に連絡をして、次週から名簿を配布してもらった。この結果、学生たちと生徒との関係が大きく変化し、学生たちは名前を覚えることの重要性を痛切に体験することになった。

名前を呼ぶことで、「覚えてくれた」という安心感、嬉しさなどから、中学生も私を名

前で呼んでくれることが多くなり、心が開けた瞬間を間近で見ることが出来ました。

後半の授業では、名前を覚えることを意識して、最後の方では、ほぼクラス全員の名前を覚えることができた。そして名前で生徒に呼びかけると、より明るい雰囲気じゃべることができるようになった。

名前を覚えることによって親近感が持て、日に日に話せる子が増えていくことによって安心感が増えて、自分らしく振舞え、会話も増えていきました。

生徒の名前を覚えることの重要性については教育実習の事前指導でも強調しているが、このプログラムのように3ヵ月半にわたる期間では、いっそう生徒との関わりの変化が明らかになり、学生たちもその意義がよく理解できただろう。2-3週間の教育実習では得られない体験ができることが、このプログラムの利点である。

こうして生徒との関係が深まってくるにつれて、新しい課題に学生は直面した。それは生徒に頼られすぎるとの問題である。

6) 支援的指導の理解

このプログラムでの学生の役割が、生徒に「教える」のではなく、生徒の自主的活動を側面から「支援する」ことだということは、授業の最初に説明してあったが、学生たちは日々の体験を通して、その意味を理解していった。

あまりにも手助けをしすぎると、頼りすぎて自分たちでは考えられなくなっていました。そして、1回に多くの情報を与えすぎると混乱してしまうことを知りました。

生徒に対して、こうすればいいのではないかというアドバイスをすると全くそのままの

形でアドバイスが採用されてしまっていて、生徒の自主性を奪ってしまったと気づいた。アドバイスに関しては、具体的に述べるのではなく大まかに抽象的に述べるべきだと学んだ。

私の提案の仕方は押し付けられた、と感じる子もいるかもしれない。ここに行けばこんな体験ができそうだよ、こんな仕事をさせてもらえそうだね、と声を掛ければよかったと思った。

生徒は何でもすぐに質問してくる。だが、そこで教師もすぐ答えるのではなく、まずは自分で調べさせることをさせないといけない。自分で考え行動した結果、それでもわからなければ次の支援をする。この繰り返しだと思ふ。

次の学生は、生徒の学習や成長の視点から自らの支援活動を意味づけるようになっていく。

教育の目的は、中学生の成長です。そのために必要なことを考えた時、単純に答えに至る過程を教え、答えを教えるだけではあまり中学生の成長にならないことに気づきました。……「本当にすべきことは、中学生に考えさせることではないだろうか」と考えた私は、「自分だったらこのようにする」などは言わず、「このような考え方があるよ」や、「このように考えてみてはどうだろうか」などの接し方をすれば良かったと反省しています。

反省するだけでなく、適切な行動に切り替えることができた学生もいた。

生徒は私が言うことをそのまま取り入れてしまい自分たちで考えようとしなかったことがありました。そこをどうしようかと工夫

し、もっと抽象的に表現して、選択肢を広げようような話し方に切り替えたところ、アドバイスをした後に自分たちで議論して決めました。

示唆的なアドバイスの仕方を悩み考えることで「支援する」ことの意味とテクニックを自らのものとして獲得していったことに、学生の成長を見る思いがする。学生たちはこうして試行錯誤や反省を重ねながら、次第に教師としてのあり方を追求する姿勢をもつようになっていく。

7) 教師になろうとする者としての自覚

生徒たちから頼られ、アドバイスを求められ、時には先生と呼ばれたりする中で、また中学校教員の指導の姿勢や生徒との関係の作り方を目の当たりにすることによって、学生たちは教師としての自覚のようなものを身につけ始める。

先生ともなると、その影響力はとても大きいと思うし、だからこそ、学校という場所にいるときは一段と意識して気をつけなければならないのだと感じた。……自分の語彙力の無さやうまい言葉を返せないこと、いかに相手に自分の気持ちをうまく伝えるか、などもっと自分を見直して成長すべき点がいくつもあることに気がついた。

生徒との距離のとり方は難しいと思う。近すぎてもだめ、遠すぎてもだめ。でも、時にはしつこいくらいにその子に寄り添ったり、逆に一步下がって見守ってあげなければならぬときもある。良い教師になるには、タイミングを間違えてはいけないのではないかと思った。……さらに教師は決してぶれない軸を持ち、常に一貫した態度で生徒に接しなければならない。

その他、自分が教師なった時のことを考えて能力・実力をつけるために努力しなければならぬと書いた学生が多数いた。こうした努力目標が明確になったことは、今後の学生生活を意義あるものにつなげていくだろう。

8) 自身の変化に気づく

学習の成果が、変容によって測られるとすれば、学生が自分自身の中に見出した変化こそ、このプログラムの一番の成果であるといえる。学生自身の気づきをいくつか紹介してみよう。

最初自分の中にあった生徒に接することの恐怖心が消えたことが、一番の私の心境の変化でないかと思う。そして、生徒たちの実態を把握することによって、接し方もなんとなくだがつかめた気がする。

私がこの体験を通して自分の中で変化したと感ずることは「考えながら行動すること」の大切さと難しさ、「気づき」の重要性に気づいたことだと思います。……そういった考える姿勢が身についたのではないかと……

自分が教えるのではなく、共に学ぶという視点で考えていこうとする……これは自分の中で変化した一番成長した点であると思います。

講義で話を聞いても感覚的にしか分からなかったことも身をもって分かり、……判断はできても体が動かなかったりしましたが、最後の授業では、最初の授業のときよりも断然動きが良くなっていたはずでした。

授業をやるまえは、……中学校と関わるということにたいして、一度経験をすれば満足だと思っていたが、最後のほうでは、またかかわっていこうと思うようになり、今年

の夏休みの間ボランティアとして松本中学校の補習授業に参加することになった。以上がこの授業を経験した自分の変化だと思えます。

自らの変化に気づいた学生もいたが、教員の目から見て確実な変化をとげた学生も多かった。自分の活動の意味が理解でき、生徒に対する責任感や愛情が生れてくるにつれて、学生の顔が生き生きとし、態度が積極的になっていったのである。

4. おわりに

これまで学生のレポートから彼らの活動と認識の変化の軌跡を追ってみて、彼らの素晴らしい成長ぶりを知ると、このような機会を与えてくれた松本中学校の教員と生徒のみなさんに対する感謝の気持ちでいっぱいになる。何をすればよいのかも分からずオロオロしているだけの学生が、生徒との関係を気づこうと努力する中で、役割を自覚し、「支援する」ことの意味と重要性に気づくようになっていったのは、3ヶ月半という長期間にわたって学生を受け入れてくれた松本中学校側の忍耐強い協力があってこそその成果である。

手探りで始めた新しいプロジェクトであったから、準備不足もあり失敗もあった。反省点を述べてみると、第1は、実際に総合的学習を担当する中学校側の教員と大学教員との話し合いの機会を持てなかったことである。校長やプロジェクト・リーダーたちとの協議は事前・事後を含めて数回行ったが、授業担当者との会合をする余裕がなかったため、学生の実情や大学側の意図が、教員たちに十分伝わっていない場合もあったことは否めない。それが学生たちの戸惑いの一因にもなっていたように思われる。

第2に、学生を戸惑わせたもう一つの要因は、各カテゴリーの内容や活動の把握が十分にできないまま学生たちが生徒たちの中に入っていったことである。もちろん学生たちのグルー

分けをする前に、中学校教員から一応の内容説明を受けていたのだが、そこでの自分の役割や貢献のイメージが湧かないまま生徒との顔合わせに至ってしまった。学生たちは、生徒より年長の学生として、また教職を志す者として生徒に接することを期待されていたが、いかんせんカテゴリーの課題についての学生たちの知識が不足していたので、生徒たちに年長者として接することができなかった。学生たちの恐怖や焦りもそうした点に発していたように思う。もし中学校での授業の最初に、そのグループに配属された学生が課題について、たとえば「コンビニの歴史」や「グリーン・カーテンの事例」などを簡単に生徒に説明するような機会が与えられていれば、学生たちはもっとスナナリとそして自信をもって支援活動に入っていたのではないだろうか、と残念でならない。

一方良かったと思われる点は、第1に、中学校側の教員が何度も大学での授業に部分参加して、生徒の状況および学生の心構えや留意事項を説明する機会をもったこと。中学校の教員の話は、大学教員による説明よりもずっと説得力がある。徒歩15分ほどの近隣校ゆえに可能だったことだが、中学校教員側が時間をやり繰りしてくれたからこそ実行できたことを忘れてはならない。

第2は、学生が毎回、授業の観察結果や感想についてのレポートを提出し、また最後にこれまでの活動とそこからの学びを振り返る長いレポートを書いたこと。こうした作業によって、学生たちは自分の体験を再確認し、自らの気づきや変化を跡づけることができたようだ。大学の教員もレポートによって学生の成長と発達をはっきりと確認することができ、プロジェクトの意義と成果を確信できた。

第3に、日程の中間に大学でのまとめと反省の日を設定したこと。この時に、学生からの意見や要望を聞き取ることができ、またばらばらに分かれて活動している学生たちがグループ討議をする中で、中学校における自分たちの役割

や生徒との関係の持ち方について情報交換し、励ましあう機会を持つことができた。これはその後の学生たちの活動をより積極的・活発にすることに役立ったはずである。

最後にもう一度、松本中学校の生徒と教員のみなさんに深甚な感謝を捧げたい。

注

- 1) 2005年度の活動報告は、「生徒の学び・学生の学び——中大連携の試み」(『神奈川大学心理・教育研究論集』第26号(2007年))に掲載されている。